

▶ 子どもたちを救え

子どもたちを救え ～ジュニアプログラムの試み～

[第2回] マナーキッズ・テニス・プロジェクト 07.10.23

小林 信也

1. ライフセービング協会の取り組み
2. マナーキッズ・テニス・プロジェクト
3. ゴルフ界の取り組み

ご意見・ご感想
をお寄せください

📧 投稿はこちらまで



各競技団体はいま、こぞって『ジュニアの育成』に取り組んでいる。その目的は、「競技人口を増やす」「未来のスター選手を発掘する」「競技を活性化する」等。多くの競技が、不況や少子化のあおりを受けて人気が低迷している、と感じているようだ。野球やサッカーに比べて「マイナーだ」「テレビでなかなか取り上げてくれない」「テレビでやらないからスポンサーもつかないし、競技を始めるジュニアや若者も少ない」といった不満や焦りを多くのスポーツ関係者から聞く。

ジュニアの育成は、それを解消する一環だと言われるが、そうした動きに接するたび、「何のためにスポーツをさせるのか？」
素朴な疑問を、筆者はいつも感じる。

そんな中で、テニス界では独自の取り組みが行われていると聞いた。
“マナーキッズ・テニス・プロジェクト”
テニスと一緒に「子どもたちにあいさつを教える」試みだという。

マナーキッズ教室を見に行った

9月30日(日)、千葉県白井市の清水口小学校で行われた『マナーキッズ教室』を見に行った。約50人の子どもたちが横一列に並び、開会式が行われていた。ひとりひとり、自己紹介をする。



「これだけ大勢の前で自己紹介をするだけで、倒れてしまう子もいます」

マナーキッズ・プロジェクトの推進者・田中日出男理事長が教えてくれた。

「横一列に並ばせるだけで『軍隊式だ』と反発する指導者もいるんです。そうじゃありません。一列に並ぶことも大切な勉強です」

田中さんが苦笑いする。日本の常識が欧米に感化されて大きく変わっている。日本の伝統文化がすっかり失われつつある中、あいさつも形骸化し、軽視されている。

教室の最初に、小笠原流礼法の鈴木万亀子総師範があいさつを子どもたちに教える。

「まず相手にしっかりと身体を向けて、相手の眼を見ます。『おはようございます』『よろしくお願いします』、しっかり言ったあとでお辞儀をします。顔をあげたらもう一度相手の眼を見ます。ここまでがお辞儀です。そのとき、やさしい顔をするのがマナーです」



鈴木総師範の指導に従って、子どもたちがあいさつを練習する。最初はぎこちないが、だんだん姿勢がキリツとしてくる。

「首を下げるんじゃないけません。腰を折って、心を下げる。そうすれば頭は自然に垂れてきます。相手から首筋が見えるのは、品のない卑しいお辞儀です。あいさつとは、自分の心の中のリボンを出して、相手の心の中のリボンと結びつけること。心のこもったあいさつをしましょう」

このあと、通常コートでの4分の1の広さで行うショートテニスの指導に移る。コーチからボールをもらう前、必ずあいさつをする。鈴木総師範に教えてもらったあいさつをテニスの練習の中で繰り返し実行することで、正しいあいさつを身につけていく。子どもたちの姿勢や表情、体育館全体の雰囲気明らかに毅然としたものになっていく。「前頭葉にある自己抑制機能が、正しい姿勢をするだけで前向きな考え方になるんです」(鈴木総師範)

父母も一緒にあいさつを学ぶ

子どもたちが熱心にテニスに取り組み始めたころ、同行の父母たちは、別の教室で鈴木万亀子総師範の講座を受ける。短時間だが、これがまた有意義なものだった。

「あいさつは目下の者から目上の人にするものです。だから朝のあいさつも、子どもから先にさせましょう。しかも、『おはよう』のあとに、『おはよう、ママ』と、名前を言わせることが大事です。言われたら、朝ご飯の支度をしていても、ちゃんと振り向いて、子どもの顔を見て応えてあげましょう。これは朝の点検です。そうやって毎朝子どもとあいさつを交わしたら、もしいつもと様子が違ったり具合が悪そうならすぐわかります」



身体の変調だけでなく、学校で何か悩み事がある、いじめにあっているといった、子どもがなかなか言い出せないことも、無言のうちに親が受けとめてあげられるという。

最近では、上下関係を悪い発想だとする風潮がある。親子でも友だち的な関係の家庭が少なくない。しかし、それが現代の様々な問題を引き起こしていると、鈴木総師範はきっぱりと教えてくれた。「日本には上座、下座という考え方があります。上下関係をはっきりさせる。これは大切です。今の親は、子どもに尊敬されるべき立場であることを忘れてしています。親が子の顔色を見ている。反対です。子どもが親の顔色を見るべきなんです」

あいさつを学ぶなら、『あいさつ教室』でもいいのではないか？ という考えも浮かぶ。だが、目の前で喜々として取り組む子どもたちを見ると、スポーツの中で学ぶからこそ、あいさつが照れずにできる、反復の中で身に付くことを実感した。

「あいさつを教えると、子どもたちが明らかに変わります。いまの子どもだって、教えてあげれば、きちんとできるんです」

マナーキッズ・プロジェクトの推進者である田中日出男理事長が言う。

「元々は早稲田大学のテニス部が平成8年に、子どもたちに『あいさつを学ぶテニス教室』を始めたのが前身です。私は会社を定年退職したあと、日本テニス協会の仕事を手伝ってくれと頼まれました。その中でこのマナーキッズ・プロジェクトを提案したのです。最初はあまり賛同者はいませんでした(苦笑)」

平成16年、テスト的に2度実施。これが好評で17年には55回、18年には90回、今年はずでに100回を超える勢いで全国の学校やクラブなどから要請を受け開催するまでになった。

田中さんは、このプロジェクトをNPO法人化し、理事長になった。手帳を見せてもらうと、全国各地、連日のように飛び回る毎日。田中さんはボランティアでこの活動に携わっている。開催した会場には、協賛スポンサーから提供されるショートテニスの用具をプレゼントして帰ってくるという。

協会のためでなく、本人のために

いまスポーツ界はすっかり変質している。ビジネスがスポーツ運営の根幹にがっちり入り込み、スポーツを普及する目的とビジネスの打算が最初から共存している。ジュニアの育成と言いながら、子どもひとりひとりの人生を真剣に考えるのではなく、協会側のビジネスやメリットのために子どもを利用する意図が主眼になっている例も少なくない。

「マナーキッズは、テニスだけでなく、いろいろなスポーツと連携したいと思っています。白井市では初めて、ミニバスケとと一緒にやりました」(田中さん)

筆者自身、武術を学ぶ中で、『あいさつの力』を実感し、その発信を続けている。あいさつは決して形式的、精神的なものではない。正しいあいさつは、身体の中、心の中を鮮やかに変える機能を持っている。それはいわば生活の中にある『型』なのだ。



子どもたちが何のためにスポーツをするのか、なぜスポーツをさせるのか。ジュニア育成は「一部のスター選手発掘のため」ではない。ひとりひとりの豊かな人生のためにスポーツはある。マナーキッズ・プロジェクトは、その原点をはっきり感じさせてくれた。